

第26回(平成23年10月) パソコンスピード認定試験(日本語) 問題

2010年は、宇宙に関するニュースが相次ぎました。6月には宇宙探査機のはやぶさが、打ち上げから7年、60億キロの旅を終え無事地球に帰ってきました。はやぶさが向かったのは小惑星イトカワです。当初の計画では、2005年にその表面から物質のサンプルを採集し、2007年の夏に帰ってくる予定でした。しかし、装置の故障や燃料漏れなど数々のトラブルに見舞われ、通信も途絶えて、地球への帰還ができなくなったと発表されました。ところが、関係者の努力によってはやぶさとの通信が回復し、イオンエンジンを再起動させることに成功し、見事帰還しました。サンプルを入れたカプセルは、オーストラリアのウーメラ砂漠に着陸し回収され、中に入っていた微粒子1500個がイトカワのものであることが分かりました。

12月の初めには、宇宙人発見のニュースが世界を駆け巡りました。そもそもの発端は11月末に、NASAが「宇宙生物学上の発見について」というテーマで会見を行うと発表したことでした。詳しい情報がなかったことからいろいろな憶測を呼んで、宇宙人発見のニュースになったのです。ところが、12月2日に行われたNASAの会見の内容は、宇宙人の発見ではなく、ヒ素を食べる細菌の新発見についてでした。ヒ素は生物にとっては高い毒性を持った物質で、ねずみを駆除するのにも用いられてきました。それを食べる細菌が発見されたことで、地球外には、わたしたちが知っている生物とは異なる生命がいる可能性もあると考えることができます。

ところで、わたしが子供のころには、宇宙人といえば、たこのような姿をしていると信じられていました。どうやらこれは、イギリスの作家ウェルズが、1898年に発表した「宇宙戦争」というSF小説に原因があるようです。そのストーリーは、火星から巨大な頭を持ち、まるでたこのような手足をした宇宙人が地球を征服するためにやってくるという内容です。ウェルズは、火星の重力は地球の約3分の1なので体も軽くなり、足は細くてもかまわないと考え、脳だけが発達した1メートル程の頭を持った細長い16本足の火星人を生み出したのです。その後、1930年代になり、表紙や挿絵にたこ型の宇宙人が描かれたSF雑誌が数多く創刊されました。わたしが子供のころに見た漫画もおそらくこれをまねたものだったのでしょう。今回のNASAの発表は肩透かしに終わりましたが、きっといつかは本物の地球外生命発見のニュースが飛び込んでくるような気がします。

先生や上司から「きみの見方は一面的だ。もっと自分の頭で考えなさい」などの指摘を受けたことはないでしょうか。では、一体どうすればよいのでしょうか。その具体的な方法は、だれも教えてはくれないし、教科書にも載っていません。もちろん事情はそれぞれ異なり、複雑に絡み合った問題を簡単に解決する万能の処方せんなどありません。しかし、多方面から物事を考える思考の手掛かりはあるはずです。

一つ目は、自分の頭で考えるには、常識や他人の意見にとらわれないことです。例えば「情報化時代の現在では」や「新聞の記事による」などと言われると、わたしたちは深く考えることなく、その意見をうのみにしてしまいます。社会人なら、所属している組織の物事の考え方や約束事に縛られがちです。このような常識にとらわれることが、一面的な

ものの見方への第一歩となっているのではないのでしょうか。この拘束から逃れることは、	1, 425
難しいことではありません。現状を一度、批判的な目で見直してみることです。現在の状	1, 465
況をよく検討もせず盲信してしまう点に思考の落とし穴があります。かつて人類は、地球	1, 505
が宇宙の中心に静止し、ほかのすべての天体が周りを回っていると考えていました。しか	1, 545
し、それは地動説によって否定されました。現在の科学で自明のことが、将来覆されるこ	1, 585
ともあります。すべての学問は、それまで常識とされていたことを見直すことによって発	1, 625
展してきたともいえるでしょう。わたしたちの身の回りや社会の出来事も、批判的な立場	1, 665
からの視点がないと停滞して進歩はありません。これは、言い換えれば他者の視点を持つ	1, 705
ということです。男性なら女性の、若者だったら老人の、メーカーなら消費者の価値観で	1, 745
考えてみましょう。すると、ふだんは気にも留めない道路の凹凸が、高齢者には障害物に	1, 785
なっていることに気づいたり、製品の最新機能が利用者にはかえって不便なことが分かっ	1, 825
たりします。	1, 832
二つ目は、比較の視点を持つことです。ほかの地域や組織、過去の事例などと比べてみ	1, 872
るのです。例えば、日本人は集団主義だから、企業において終身雇用が定着したという説	1, 912
があります。この説についてほかの国と比較をしてみましょう。個人主義の国といわれる	1, 952
アメリカでは、優良企業の中には終身雇用制を採っている会社もあります。逆に、儒教文	1, 992
化の影響で集団主義的な傾向の強い韓国ですが、定年まで同じ会社にいる労働者は少数で	2, 032
す。他国と比較すれば、必ずしも集団主義イコール終身雇用とはいえないことが分かるで	2, 072
しょう。このように比較をすることは、独自の視点を見付ける有効な手段となります。	2, 112
三つ目は、鳥の目と虫の目を持つことです。前者は高い位置から広い範囲を見渡すこと	2, 152
で、後者は対象物に接近して詳細をじっくり観察することを指します。最近では企業や役所	2, 192
などでも合理化が叫ばれ、人員が削減されています。確かに合理化すれば人件費を減らす	2, 232
ことはできるでしょう。しかし、それによって組織全体のサービスのレベルが下がってし	2, 272
まったというケースも報告されています。また、タクシー業界など規制緩和を進め過ぎて	2, 312
かえって競争が激しくなり、運転手が低賃金で長時間働くようになったという例もありま	2, 352
す。我々はいづれ自分の身の回りや所属する部署の利益だけを優先してしまうことがあるの	2, 392
で、物事を考える場合には、個々の具体的な場合だけでなく、より広い範囲の一般的なレ	2, 432
ベルで全体を見通すことも必要です。個別の例にこだわってしまうと、人によって事情が	2, 472
違ふとか時や場所によって原因もさまざまということになり、そこで思考は再び停止し	2, 512
てしまいます。それを防ぐのに役立つのが「鳥の目と虫の目」という複眼思考です。	2, 550